

スモールコーパス利用の一研究

— Ackroyd の場合 —

稲 木 昭 子

A Small-Corpus-Based Approach to Agatha Christie's Work

Akiko INAKI

1. はじめに

Agatha Christie の作品, *The Murder of Roger Ackroyd* の舞台であるキングス・アボット村では, Mrs. Ferrars の自殺に関してあれこれうわさが飛び交っていた。夫人が夫を殺したらしい, その上夫殺しで誰かに恐喝されているらしい, さらに夫人と村の名士である Roger Ackroyd は結婚するらしいといううわさまでもある。ところがそのさなか, この Ackroyd が刺殺されているのが発見された。警察は犯行の動機, 目的, 手掛かりなどの一切がつかめず, 事件は迷宮入りの様相を呈しはじめていた。そんな時たまたま村に引っ越してきて, かぼちゃ作りに勤しんでいた灰色の脳細胞 Hercule Poirot が, Ackroyd の姪 Flora Ackroyd のたつての願いで, 敢然と立ち上がった。村の医師 Sheppard は行きがかり上, しばらくは, Poirot と行動を共にして, 事件の解決に協力する。

物語は, Sheppard が残した手記の形で綴られている。しかも, 種を明かせば, この語り手こそが Mrs. Ferrars を恐喝し, さらに Ackroyd を殺した犯人なのである。この特殊な状況の中で, 語り手は自分の行動や心の動きをどのように語っているのであろうか, あるいは他の登場人物とどのような駆け引きを行いながら, 犯人であることを隠し通していくのであろうか。

推理小説という枠組みの中では, 作者は, 犯人明かしをできる限り最後まで引き延ばし, 同時に読者に対しては犯人を推理させるために必要十分な情報を順次与えていかねばならない。ところが Christie はこの作品で推理小説におけるタブーに挑戦し, 物議をかもした。つまり語り手自身が犯人という設定を行った。そこでこの語り手は, 推理小説の語り手としてのフェアネス (fairness) を守らなければならないというメタ的な枷を負いつつ, この事件を物語る

ことになる。これらの条件のせめぎあいの中で、作者は、犯人である語り手の口を借りて、犯人を明らかにしていくための事実を述べつつ、犯人確定を最後まで引き延ばすために、どのように物語を構築して展開させ、ことばの上での工夫をこらしているのであろうか。

ここではまず、犯人である語り手が物語の中で、自分をどのように語り、他の登場人物とどのような態度で係わっているのかを捉えたい。この点は、語り手と犯人が同一であるという特殊な状況での特徴的なことば遣いとして捉えられる。次に語り手のことばの中に、特に読者の眼を意識した場合を捉えたい。これは物語の中ではごく自然な表現ではあるが、読者を誤った方向に導く可能性を残しているという意味で、結局最終的には伏線となりうる巧妙なことば遣いとして捉えられる。

前半の点に関してはコンピュータを使用して、そのことば遣いの特徴の一端を捉えることにする。このために、具体的には作品をデータベース化して、スモール・コーパス (small corpus) を作成し、このコーパスを言語処理プログラムである *WordSmith* (*WordSmith Tools* Version 3) で処理することにする¹⁾。

2. 不安感の表現

物語では、語り手の恐喝がひょっとしてばれるのではないかという不安感や、ばくぜんとした未来に対する悪い予感が、時にはその語調が和らげられた形で、絶えずでてくる。例えば次の様な例がある。各引用文の最後の括弧の中の数字は、引用箇所が、物語全体を 100 とすれば何%でヒットしたかを示す数値である。つまり、物語のどの辺りで使われているのかを示す指標である。

(1) I think I can safely say that it was at this moment that a foreboding of the future first swept over me. <4>

(2) I felt a momentary throb of anxiety. <14>

この不安感を表す単語の 1 例として、'uneasy' をコーパスで検索すると、全部で 9 件抽出されるが、結果のコンコーダンス (concordance) から、Sheppard に関係するラインのみを抽出すると、次の 7 件となる。

N	Concordance	Set TagWord No.	File	%
1	plainly enough. And was veryuneasy. All sorts of forebodin	9,274	kroyd.txt	13
2	der to satisfy her, and had an uneasy feeling that she sawt	11,521	kroyd.txt	16
3	d practical oke has made me uneasy. I'd just like to satisfy	11,977	kroyd.txt	17
4	so, sir. It makes me feel quite uneasy myself. If you don't ob	11,995	kroyd.txt	17
5	about it." For some time I felt uneasy as to our position. We	25,807	kroyd.txt	37
6	consequently rendered acutely uneasy when forced to practic	31,749	kroyd.txt	45
7	," she explained. I felt rather uneasy. Caroline is bad enou	40,624	kroyd.txt	58

物語のどの辺りで出てくるのかを視覚化したプロット (plot) では次のようになる。

N	File	Words	Hits	per 1,000	Plot
1	ackroyd.t	70,485	7	0.10	

コンコードダンスの最初のラインのコンテキストを示すと次のようになる。

- (3) Wait. Don't you see I'm in such a state of nerves that I can hardly contain myself?" I saw that plainly enough. And I was very uneasy. All sorts of forebodings assailed me. <13>

(3)では不安感や不吉な予感の存在は述べられているが、その内容は具体的に明らかにされていない。実はこの点で、自分の恐喝が Ackroyd にばれたのではないかという不安感をうまくカムフラージュして、一見 Ackroyd のことを心配しているような印象を与える。読者の理解の仕方にズレが生じる可能性をうまく利用した例である。

コンコードダンス・ラインの各行の最終数値およびプロットから、検索語の 'uneasy' は、物語の前半ぐらいまでに抽出され、後半には出てこないことが分かる。最終ヒットは <58> という数値で表示されている。

物語の前半では、不安の気持があるということは述べられているが、その具体的な内容は示されていない。しかし真中辺りより、不安の気持ちの表現は変化していく。

- (4) "The patients?" I demanded unbelievably. <47>
- (5) I stayed there staring into the fire and thinking over Caroline's words. Had Poirot really come to gain information about Miss Russell, or was it only Caroline's tortuous mind that interpreted everything according to her own ideas? <47>
- (6) "I am helping him with the case," she explained. I felt rather uneasy. <58>
- (7) I see now that I was unbelievably stupid about these boots. I failed altogether to grasp the point. <58>
- (8) But at the time I had no suspicion of the fact. <73>

(4)では、Poirot に患者のことを探られるということは、Sheppard にとって実に意外なことであり、あまり好ましいことではない。そこで思わず、聞き違いではないかと本音が吐露される。(5)では、Poirot の行動に疑問を抱き始め、彼は本当に Miss Russell についての情報を得るためにきたのであろうか、それとも姉 Caroline の勝手な考えに過ぎないのであろうか、と自分の心情の本当のところを吐露している。(6)も、Caroline がこの事件に乗り出すことを聞いて、自分の不安感を思ったままに述べる。(7)は、自分の犯罪を隠すために押さえておかねばならなかった点をつかんでいなかった、と自分のおろかさに気付く。(8)では、あの時 Poirot は事件の全貌を押さえていたように思われるが、自分はその時全く思い違いをしてい

た、と自分の本音を吐く。

同じ不安感ながら、後半は不安感が漠然と述べられるのではなく、その時の語り手の心の動揺が内容を含めた形で表現されていることになる。物語の真中辺りを境として物語は大きく変化していることになるが、この箇所は次の〈54〉であると考えられる。

- (9) As I say, up till the Monday evening, my narrative might have been that of Poirot himself. I played Watson to his Sherlock. But after Monday our ways diverged. Poirot was busy on his own account. I got to hear of what he was doing, because in King's Abbot, you get to hear of everything, but he did not take me into his confidence beforehand. And I, too, had my own pre-occupations. 〈54〉

つまり、Sheppard と Poirot は事件解決のためにそれまで行動を共にしていたが、この〈54〉を境に別行動をとり始める。この点から、Sheppard と Poirot の直接的な駆け引きはなくなるので、Sheppard は間接的に Poirot の動きに絶えず細心の注意を払いつつ、彼の動向を収集することになる。この間接的な情報を述べることで物語は進行するわけであるから、直接 Poirot との係わりがない分、不安感 は自然に出てくる心情として表現される。

3. 周囲の人々との係わり表現

Poirot が Ackroyd を殺した犯人探しに乗り出してきた時、Sheppard は探偵と行動を共にし、彼の調査や推理に大きな関心を寄せる。むしろ、熱心に手助けをすることにより、そのやり方を見張っている。この時の Sheppard の、Poirot も含めた周囲の人々に対する態度を表す語の一部として、'care/careful/carefully' を検索すると、結果のコンコダンスとプロットは次のようになる。

N	Concordance	Set TagWord No.	File	%
1	lid being shut down gently and carefully. I repeated the action	7,814	kroyd.txt	11
2	hat little had to be done. was careful not to disturb the posit	12,514	kroyd.txt	18
3	hat little had to be done. was careful not to disturb the posit	13,075	kroyd.txt	18
4	I explained the circumstances carefully. "A telephone messa	13,606	kroyd.txt	19
5	ora stamped her foot. I don't care. There must be a simple	18,425	kroyd.txt	26
6	ademoiselle. Not that I do not care for money." His eyes sh	18,906	kroyd.txt	27
7	Thus enjoined, I plunged into a careful narrative, embodying all	19,035	kroyd.txt	27
8	moment to choose my words carefully. "I thought someone	19,147	kroyd.txt	27
9	od many things of it, but I was careful not to say them to Car	31,981	kroyd.txt	46
10	"I told him." "I took very good care not to, I said. I'm fond of	32,664	kroyd.txt	47
11	y jaw dropped. had not been careful at all. "Not that it met	61,991	kroyd.txt	89

N	File	Words	Hits	per 1,000	Plot
1	ackroyd.txt	70,486	11	0.16	

② 前半に偏って抽出される各検索語のプロット

sharply

N	File	Words	Hits	per 1,000	Plot
1	backroyd.txt	70,488	9	0.13	

coldly

N	File	Words	Hits	per 1,000	Plot
1	backroyd.txt	70,488	4	0.06	

gravely

N	File	Words	Hits	per 1,000	Plot
1	backroyd.txt	70,488	3	0.04	

hastily

N	File	Words	Hits	per 1,000	Plot
1	backroyd.txt	70,488	3	0.04	

hesitantly/hesitatingly

N	File	Words	Hits	per 1,000	Plot
1	backroyd.txt	70,488	3	0.04	

sympathetically

N	File	Words	Hits	per 1,000	Plot
1	backroyd.txt	70,484	3	0.04	

前半に偏って見られる -ly 副詞がヒットする箇所の正確な数値は、コンコーダンスから、'sharply' は〈2-58〉, 'coldly' は〈1-59〉, 'gravely' は〈26-38〉, 'hastily' は〈1-56〉, 'hesitantly' は〈17-44〉, 'sympathetically' は〈7-38〉の間となり、これらもまた物語の半分までに集中していることが分かる。一番ヒット数の多い 'sharply' (油断なく、鋭く、さすように) のコンコーダンスは次のようになる。

N	Concordance	Set TagWord No.	File	%
1	dn't leave a letter of any kind," I said sharply, and not seeing wherethe a	1,295	kroyd.txt	2
2	ull heavy voice. "Who by?" asked sharply, "His wife." "How do you k	9,682	kroyd.txt	14
3	the hall. "Where is he?" I demanded sharply, "I beg your pardon, sir?" "Y	11,723	kroyd.txt	16
4	er. "You mustn't touch :hat," I said sharply, "Go at once to the telepho	12,468	kroyd.txt	18
5	ger. "You mustn't touch :hat," I said sharply, "Go at once to the telepho	13,029	kroyd.txt	18
6	e all the evening." "Not at all," I said sharply. The little detective shook	19,276	kroyd.txt	27
7	use." "She is sure of hat?" I asked sharply, "Quite sure. She knowshi	23,398	kroyd.txt	33
8	y talking about t." Caroline," I said sharply, "did you tell M. Poirot what	32,595	kroyd.txt	47
9	he is?" she asked. "Do you?" said sharply. She shook her head. "No, i	40,459	kroyd.txt	58

'sharply' は特に前半、〈58〉までに偏っているが、この数値は前述の検索語 'uneasy' の場合と符合する。このことは、語り手は不安感の裏返しで、周囲の人には逆に攻撃的あるいは相手をさすような調子で会話をしていることが示唆される。1例を示す。

- (12) And I was able to tell him the way people were already talking about it. “Caroline,” I said sharply, “did you tell M. Poirot what you overheard in the wood that day?” <47>

前半に偏る -ly 副詞の語義から, Sheppard は, 相手に「油断なく, 鋭く」(sharply) ことばを突っ込み, 細心の注意を払いつつも「冷静に」(coldly) 応答し, 「重々しく」(gravely) 発話することで会話の流れを変え, また流れが自分に不利にならないように, 時には「あわてて」(hastily) 述べたり, さらに自分の混乱振りを「ためらいがちに」(hesitantly) 付け加えることもある, ということが示される。2例を追加する。

- (13) “I wish you’d tell me something of your methods,” I said hastily, to cover my confusion. <30>
- (14) “She seemed a nice girl,” I said hesitatingly. Poirot repeated my words, but whereas I had laid a slight stress on the fourth word, he put it on the second. “She seemed a nice girl—yes.” <44>

③ 後半に偏って抽出される各検索語のプロット

dryly

N	File	Words	Hits	per 1,000	Plot
1	backroyd.txt	70,488	7	0.10	

incredulously

N	File	Words	Hits	per 1,000	Plot
1	backroyd.txt	70,491	5	0.07	

後半に偏って見られる dryly は <43-83> の間で抽出される。この ‘dryly’ は物語で 16 回使用されているが, 7 回が Sheppard, 6 回が Poirot と結びついている。しかも両方とも後半に集中する。後半, Poirot は冷静に, 平然とその使うことばを選択し, Sheppard の方もそれに冷静に対処するという構図が見えてくる。‘incredulously’ は, それぞれ <73-90> で抽出されるが, 全てが Sheppard と結びついている。<70> 以降にヒットが集中するということで, この箇所の特定をすると, Poirot が犯人をほぼ確信したところになる。

- (15) Let us take a man—a very ordinary man. A man with no idea of murder in his heart. There is in him somewhere a strain of weakness—deep down. It has so far never been called into play.... <70>

一方 Poirot の場合には, 発話動詞と共起する -ly 副詞に特徴が見られるのであろうか。

① 全体に亘って抽出される各検索語のプロット

quietly

N	File	Words	Hits	per 1,000	Plot
1	ackroyd.txt	70,490	11	0.16	

seriously

N	File	Words	Hits	per 1,000	Plot
1	ackroyd.txt	70,487	4	0.06	

② 後半に偏って抽出される各検索語のプロット

thoughtfully

N	File	Words	Hits	per 1,000	Plot
1	ackroyd.txt	70,487	7	0.10	

前半に偏っている -ly 副詞は抽出されない。これは Poirot の登場が物語の 〈27〉 であることにもよる。この時、Sheppard が Poirot をアクロイド事件になんとか引き込まないようにと努力するものの、結局 Flora の熱意に押されて、Poirot が事件を解決するために乗り出してくる。それでも前半の 〈27〉 以降に偏った副詞は特に見当たらない。このことは、かえって全体に亘って見られかつその一部が前半に集中している ‘quietly’ や、後半に集中している ‘thoughtfully’ の使われ方を際立たせている。

(16) Flora looking at him straight in the eyes "All the truth?" "All the truth."
 "Then I accept," said the little man quietly. "And I hope you will not regret
" 〈27〉

この ‘thoughtfully’ は、後半、Sheppard との別行動から次第に犯人を絞っていく過程に頻出している。

N	Concordance	Set TagWord No.	File	%
1	at you mean by that," he said thoughtfully. "Ah! No," as I wa	24,511	kroyd.txt	35
2	"It clears the ground," he said thoughtfully. "And it has a cer	41,567	kroyd.txt	59
3	irost nodded. "So do I," he said thoughtfully. There was a p	41,721	kroyd.txt	60
4	the field to three," said Poirot thoughtfully. "But Parker is th	42,720	kroyd.txt	61
5	ather think he did," said Poirot thoughtfully. A few minutes	43,382	kroyd.txt	62
6	hand. "No, he said Poirot thoughtfully. "No, my friend, I	50,445	kroyd.txt	72
7	ok." "I think that is all," he said thoughtfully. "Ought I-" she he	56,639	kroyd.txt	81

4. カムフラージュの表現

物語の最初で Sheppard は、Ackroyd から Mrs. Ferrars が夫を殺したことで恐喝されているということを聞かされる。語り手の Sheppard 自身がこの恐喝犯人であるが、もちろん物

語のこの最初の時点で犯人を特定させるわけにはいかない。犯人の特定化を何とかごまかさなければならぬ方法が必要となる。この恐喝の件については、単刀直入に、〈yes とも no とも言わない〉、〈何故そのようなことを言ったのか理由は分からない〉、〈自分にとってははっきりしない理由で〉などの常套表現を使って逃げる。

(17) I did not answer, but got up from the table. 〈2〉

(18) I hardly knew why I said that--except, that it had so often been Ralph. 〈4〉

(19) But for some reason, obscure to myself, I continued to urge him. 〈16〉

Sheppard は、友人の Ackroyd が自分の恐喝のことを知ったために、彼を刺殺するのだが、証拠の手紙が届いたこの場面は次のように語られる。

(20) The letter had been brought in at twenty minutes to nine. It was just on ten minutes to nine when I left him, the letter still unread. (I hesitated with my hand on the door handle, looking back and wondering if there was anything I had left undone. I could think of nothing.) 〈16〉

〔(Mrs. Ferrars の Ackroyd に宛てた) 手紙は 9 時 20 分前に (執事の Parker によって) 持ってこられた。私が彼の元を辞したのはちょうど 9 時 10 分前であった。手紙はまだ読まれていなかった。〕このわずか 2 文の間に殺人が行なわれることになる。確かに殺人のことは述べられていないものの、語られている内容に嘘は含まれない。あえて時間の経過をからめることによって、迷彩を施し、読者の眼を欺瞞する。さらに続く文のやり残したことはないかと考えた、という表現から、〈何かをやった〉ことが暗示されることになるが、おそらくこの時点で読者は〈何かをやった〉ということに思い至るわけではなく、あとから明らかになると思われる。しかしその伏線は必要である。この箇所のことば遣いは〈何かをやった〉の解釈の可能性を残したまま、読者をミスリードしていく上で、巧みな表現といわざるをえない。

医師が犯罪現場の部屋に再びもどってきた時、執事の Parker に次のように述べる。

(21) "I don't want to alarm the household," I said hesitantly. Parker went across and shut the door.... 〈17〉

自分のやりたいことをするためには、現場に家中の人が集まってきてもらっては困る。そこで、それらしき言い訳を口ごもりながら述べる。'said' と共起する 'hesitantly' が、ここでは読者へのフェアな態度を支えるために働いているともいえる。

(22) (Parker hurried away, still wiping his perspiring brow.) I did what little had to be done. 〈18〉

「ちょっとやっておかなければならぬことがあったので、私はそれを片付けた。」この一文も、この時点では〈犯罪現場の偽装工作〉を暗示するわけではないが、偽装工作になりうる余地を残したまま、読者の眼を欺瞞することは可能である。続く文 (I was careful not to disturb

the position of the body, and not to handle the dagger at all. No object was to be attained by moving it. Ackroyd had clearly been dead some little time.) で、死体の位置を動かしたり、短剣に手を触れたりしないようによく気をつけた、と書かれているものの、それ以外の〈やったこと〉については何もふれられていない。しかし、確かに内容には嘘は含まれない。これらの重要な犯罪場面や犯罪現場の偽装工作場面は、各々2文と1文で短く片付けられている。

(23) I half opened my mouth to speak, but at that moment the sound of a bell pealed through the house. <19>

(23)は読者向きには、手紙がなくなっていることを自分が述べようとしていたにもかかわらず、邪魔が入って、述べようとする行為が阻止された、と説明する。その実述べるつもりなどないわけであるから、巧妙なカムフラージュとして機能している。

(24) "I don't know," I said. "I can't say I remember noticing it—but, of course, it may have been there all the time." <24>

(24)は黒とも白ともはっきりしない、回りくどいことば使いでこの場を乗り切る。

(25) I said nothing of the blackmailing business, but contented myself with giving her the facts of... <25>

(25)の例では、恐喝の件は口外しなかったとわざわざ述べることで、一見語り手は嘘をついていないというフェアな態度を示しているようである。しかしその実、この時点でもし恐喝の件を口外すれば、自分の身に疑惑がふりかかってこないとも限らないわけであるから、この一見フェアな態度には欺瞞性が潜んでいることになる。

(26) And I, too, had my own preoccupations. On looking back, the thing that strikes me most is the piecemeal character of this period. <54>

(27) I cannot try to describe the impression his words produced. <71>

この(26)、(27)も常套的なカムフラージュ表現である。

このようなカムフラージュの働きをする表現は、物語の後半では姿を消してしまう。代わりに後半に特に集中して見られるのが、Poirot、姉のCarolineや近所の人によって明らかにされる語り手自身の性格表現である。

(28) "You're a sly dog. Hand in glove with the great detective, and not a hint as to the way things are going." <65>

(29) "You are so self-contained, James," she said. "You hate speaking...." <82>

(30) ...though you have shown yourself becoming reticent at to your own share in them. <89>

後半SheppardはPoirotと行動を共にしなくなるので、別行動のゆえに直接的に事件のこと

にふれられない、つまり Poirot の実際の行動は分からないから述べられないということが正当化される。さらに、前半には出てこないこれらの〈自分は口数が少ない〉とか、〈あまり他人に口外しない性格である〉とかの表現が、読者へのフェアな態度を微妙に保ちつつ、犯人確定の Poirot の推理を潜行させ、読者の眼をくらすことに一役かっている。これらの表現は作者にとっては伏線作りに大いに役立つ。この語り手の性格への度々の言及やさらに語り手の不安感の記述は、ある意味では、後半読者を最後まで引っ張っていくための一手法ともとれる。

5. お わ り に

検索語の使われ方、あるいは検索語のプロットなどから、物語には2つのターニングポイントがあることが分かる。一つ目は、Sheppard が発作的に Ackroyd を殺す犯罪場面と、続く犯罪の偽装工作を行うところである。これはコンコードダンスでは、犯罪場面は〈16〉、偽装工作場面は〈18〉と表示される。共に余分なことへの言及が全くない短文で示されており、かつこれらの表現は犯罪場面、偽装工作場面にもなりうる可能性を残したまま物語の最後まで読者を欺瞞する余地を残している巧妙なものである。この〈16〉、〈18〉が第一番目のターニングポイントである。二つ目は、Sheppard と Poirot が別行動をとり始める時期である。これは〈54〉という数値で表示され、表現の仕方の上で大きな境目になる。

一つ目までは、Sheppard の単刀直入的なカムフラージュの仕方、恐喝がばれることへの不安感、将来への漠然とした不安感、同時に周囲に対してとる高圧的な態度がことばに表れている。一つ目から二つ目にかけては、これらに加えて、事件解明に Poirot が参加してくることから、Sheppard の非常に注意深い態度が示される。二つ目以降は、カムフラージュになる表現が微妙に変化する。前半には見られない自分の性格への記述を度々繰り返すことにより、別行動のゆえに直接的に事件のことに触れられないという点を補強しつつ、Poirot の動きをあまりあからさまにせず、謎解きのプロセスを潜行させるという点を見事に実行する。またこの時期、不安感の表現も変化する。不安の内容がより具体的に記述され、不安感が思わずその場で吐露された感情表現となる。この自分の性格への度々の言及および自分の不安感の記述は、作者の手法から見れば、後半読者を最後まで引っ張っていくための作戦ともとれる。特に Poirot がほぼ犯人を確定するのが物語の7割目であり、語り手自身もそれに気付いているのが、〈73〉の箇所 (I know now that the whole thing lay clearly unravelled before him. He had got the last thread he needed to lead him to the truth.) であるので、この箇所から最後に犯人名を述べるところまで、物語の残る3割をどのように展開させるかは大きなポイントになる。Sheppard の性格への言及およびそれに関するエピソードは、事件の説明を避けることへの正当化の働きをしていることにもなる。

発話動詞と共起する *-ly* 副詞のプロットは其々かなり特徴的に表示される。ここでは、Sheppard と Poirot の場合の一部を取り上げたが、非常にはっきりした形で、物語全般に亘るもの、二つ目のターニングポイントまでに偏るもの、二つ目のターニングポイント以降に偏るものに区別され、使用される副詞の語義からそれぞれの時期が特徴付けられる。

物語はほぼ最後の〈97〉で、Poirot が犯人を名指しする。

- (31) “Let us recapitulate—now that all is clear. A person who was at the Three Boars earlier that day, a person who knew Ackroyd well enough to know that he had purchased a dictaphone, a person who was of a mechanical turn of mind, who had the opportunity to take the dagger from the silver table before Miss Flora arrived, who had with him a receptacle suitable for hiding the dictaphone—such as a black bag, and who had the study to himself for a few minutes after the crime was discovered while Parker was telephoning for the police. In fact—*Dr. Sheppard!*” 〈97〉

注

- 1) 作品をスキャナー (hp psc 750) で読み取り、オリジナルの英文との照合をすませた後、編集ソフトである *WZEditor* (Version 4.00 E) で整形する。作成したコーパスに ‘cackroyd.txt’ のファイル名をつける。このコーパスを *WordSmith* で処理する。このソフトは、主として *Concord* ツールと *WordList* ツールを使用する。
- 2) *WordSmith* の *WordList* ツールでは、物語で使用されている各単語の頻度 (Frequency) が表示される。当該の物語の頻度の順位 448 位で、その単語の物語の中での頻度数が 20 と示される。この辺りまでで、つまり物語の中で 20 回以上使用されている単語の中で、発話動詞となりうる動詞をピックアップすると、‘said, told, asked, explained, inquired, replied, remarked, demanded, added, suggested’ となる。どのような態度で他人と会話しているのかを見るには、これらの発話動詞と共起する副詞を調べることによって示唆されたと考えられる。作成したコーパスには tag が付与されていないので、副詞の代表として、形態的に *-ly* が付くものを検索することにする。これらの発話動詞と *-ly* 副詞が共起する場合を検索するには、*Concord* ツールで検索語を ‘*ly’ と設定して検索する。結果は 1,187 例検出される。さらに検索条件を付加して、‘*ly’ の前後 5 語の範囲で発話動詞がでてくる場合に設定する。この検索結果から該当しないものを削除すると、残りの頻度数は、303 例となる。このうち、Sheppard に関係するものは 104 例、Poirot の場合は 75 例が抽出される。

使用テキスト

Agatha Christie, ‘The Murder of Roger Ackroyd’ in *Agatha Christie: Five Classic Murders*. (1985), Avenel Books.

稲 木 昭 子

参 考 文 献

- 荒木一雄・安井 稔 (編) (1992), 『現代英文法辞典』, 三省堂.
- Biber, Douglas, S. Johansson, G. Leech, S. Conrad & E. Finegan (1999), *Longman Grammar of Spoken and Written English*, Pearson Education Ltd.
- Ghadessy, Mohsen & Robert L. Roseberry (2002), *Small Corpus Studies and ELT: Theory and practice*, John Benjamins Publishing Company.
- Huddleston, Rodney & Geoffrey K. Pullum (2002), *The Cambridge Grammar of the English Language*, Cambridge University Press.
- 稲木昭子 (2003), 「謎解きのことば学——断定をさけるテクニック」『TAM 研究論集』.
- Leech, Geoffrey N. & Michael H. Short (1995), *Style in Fiction*, Longman.
- McEnery, Tony & Andrew Wilson (eds.) (2001), *Corpus Linguistics: An Introduction*, Edinburgh University Press.
- Meyer Charles F. (2002), *English Corpus Linguistics: An Introduction*, Cambridge University Press.
- 毛利可信 (1986), 「アガサ・クリスティに英語を学ぶ 1-12」『翻訳の世界』.
- Quirk, Randolph, S. Greenbaum, G. Leech & J. Svartvik (1985), *A Comprehensive Grammar of the English Language*, Longman.